

# 個人の複数場面における言語スタイルの実態素描

## —大阪出身若年層1名を事例として—

### Variation in an Individual's Language Style Across Contexts

#### — A Case Study of a Young Osaka Speaker —

上林 葵\*

Aoi KAMBAYASHI

キーワード：スタイル切り替え, 言語実態, 大阪方言, 移住, 自己表出

Keywords: Style-Shift, Linguistic Performance, Osaka Dialect, Domestic Relocation,  
Self-expression

#### 要約

本稿は、大阪出身の若年層1名(X)を対象に、対同郷出身者/他地域出身者などの複数の場面における言語スタイルの在りようを分析した事例研究である。自然談話のデータを基に、方言形と標準語形の使用比率や各分析項目の使用実態を比較した結果、話者Xは相手の出身地域に応じて明確なスタイル切り替えを行うことが明らかになった。同郷場面では方言形が多く、特に地元大阪での会話では伝統的方言形式が顕著であった。一方の他地域場面では標準語形が主で、年齢差を考慮したとみられる丁寧度の調整に加え、相手の話し方への収束の傾向もみられた。これらから、話者は状況や相手に応じて能動的に言語スタイルを構築し、「自己表出」の手段として用いていることが示された。今後は各場面の設定条件をより精密に制御し、スタイル差の要因を多面的に検討することが求められる。

#### Abstract

This study examines a young Osaka speaker's style-shifting across different contexts. Using naturally recorded conversations, it compares the use of dialectal and standard Japanese forms in grammar and expression. The speaker shows clear switching: dialectal forms dominate in hometown interactions, especially in Osaka, while standard forms prevail in non-Osaka contexts. The degree of politeness and accommodation to the interlocutor's style also vary depending on age and relationship. These findings suggest that the speaker

---

\* 東海学園大学人文学部人文学科

actively constructs language style as a means of self-expression. The study highlights the importance of further research controlling factors like location and social relations to clarify what drives such linguistic variation.

## 1. 本稿の背景と目的

メディアの発達や生活様式の多様化、人口移動の活発化等に伴い、我々の言語活動そのものの選択肢も複雑化の一途をたどっている。モノリンガルの傾向が指摘される日本語母語話者の言語使用も、その内実は決して一様とは言えず、公的/私的、親/疎、内向き/外向きなどの場面の違いにより、自身の持つ言語的なスタイル<sup>(1)</sup>を様々に使い分けていることが、近年の研究を通じて明らかにされてきている。本稿ではそのうち、近年急速に研究が進展しつつある地域言語話者のスタイル運用に目を向け、一個人の有する複数場面でのスタイルの運用実態について、事例的に記述することを試みる。

日本国内のスタイル研究をめぐるのは、丁寧体と普通体、方言と標準語の使い分けを中心に蓄積がなされてきた(渋谷 2015)。なかでも後者の使い分けに関しては、アンケート調査等を用いた話者の言語意識に基づく分析(言語編集部編 1995 他)から、談話調査による実際の使用実態としての分析(『阪大社会言語学研究ノート』2002-2005 他)へと、一個人のスタイルに対する把握の仕方が広がりを見せている。話者の言語環境が多様化する現在においては、母方言のみならず、標準変種や移住先変種がどのようにストックされ、運用されているかなど、話者の言語運用能力の解明を試みた研究が進展しつつある(渋谷 2013; 宇田 2017 他)。併せて、近年ではそうした個々のスタイルを各場面に結びついた固定的なものとして捉えるのではなく、話者自身が自らのアイデンティティ構築の過程において能動的かつ創造的に用いるものとして捉えなおす潮流が国外研究(Eckert 2000 他)を中心に起こり、国内のスタイル研究にも影響が及んでいる(高野 2011 他)。

こうした背景を踏まえ、本稿では現代人の多様化する言語環境におけるスタイルの在りようを明らかにすることを目指し、とりわけ現在も引き続き蓄積が求められている実態面を中心とした記述分析を行う。なかでも、母方言や標準変種などの複数のスタイルを自らのストックとして保有し、日常的な使用が可能と思われる若年層の地域言語話者を対象に、どういった場面で、またどのような形でそれらのスタイルが表出しようのかを検証する。地域言語話者を対象としたこれまでの実証研究では扱われることの少なかった、親しい関係性を持つ者同士の談話に限定したうえで、話者自身の持つスタイルが表出されやすいと推測される対者の出身地域別の場面を複数設定し、それらの場面ごとの運用の在り方を考察する。本稿の目的の詳細は以下の2点である。

- a) 親しさのレベルが概ね等しく、かつ異なる出身地域の対者に対し、どのような言語運用を行うか。(場面別の運用実態)
- b) 同一場面における複数の対者に対して、言語運用の仕方に異同はあるか。違いがあるとする

れば、その要因は何か。(話者別の運用実態)

以下では、まず2節で調査の概要について述べ、3節で場面別の運用実態を分析する(上記a)。続く4節では話者別の使用実態(上記b)を詳述し、そこで得られたスタイルの異同及び要因を5節にて考察する。最後に6節でまとめと今後の課題を述べる。

## 2. 調査の概要

本節では調査の概要として、調査方法と調査協力者の情報、ならびに各談話の情報について述べておく。前節の研究目的に示したとおり、本稿では一個人の複数場面による言語スタイルの運用の異同を明らかにすることを目的とする。極力自然な状態でのデータを得るため、自然談話収録法を採用した。主要な分析対象となる話者1名(主要話者X)に対し、常体(普通体)で話すことのできる親しい間柄であることを条件に、会話の相手となる話者を「地元(同郷)出身者」と「地元以外の他地域(異郷)出身者」に分けてそれぞれ2名ずつ選んでもらい、話題等の制限のない自由会話を各1時間程度、計4場面を収録した。談話の収録は各場面の対者を含む全協力者の同意をあらかじめ得たうえで、調査者退席のもとで行い、収録後に各話者の言語意識等を問う面接調査を実施した。

なお、談話収録においては、できるだけ実態に即した多様なスタイルを得るため、相手の出身地域と親しさのレベルを概ね固定する以外には特に制限を設けていない。結果として、表1に示す話者に協力を得ることになった。表1中の「主要話者」は本稿の主要な分析対象となる話者(X)を指し、「同郷対者」は主要話者の会話相手のうち出身地が同じ相手を、「異郷対者」は出身地が異なる相手を指す。併せて、4場面の談話情報を表2に示す。

表1 協力者情報

話者ID	性別	生年	当時年齢	成育地	外住歴	
主要話者	X	男性	1997	25	大阪府松原市	22-25:東京都北区
同郷対者	S1	男性	1997	25	大阪府堺市	24-:東京都板橋区
	S2	男性	1997	26	大阪府東大阪市	なし
異郷対者	D1	男性	1995	28	新潟県新潟市	18-22:福島県福島市、22-24:愛知県名古屋、24-26:東京都北区、26-28:福岡県福岡市
	D2	男性	2000	23	神奈川県茅ヶ崎市	なし

表2 談話情報

談話ID	対者(場面)	対者との関係	調査年	調査地(場所)	文字化時間
①	S1(同郷)	中学校以来の友人	2023	東京(喫茶店)	60分20秒
②	S2(同郷)	大学以来の友人	2023	大阪(喫茶店)	60分12秒
③	D1(異郷)	職場の同期	2023	東京(X自宅)	60分16秒
④	D2(異郷)	職場の後輩	2023	東京(喫茶店)	60分13秒

本稿の主要話者である X は、言語形成期（0-20 歳前後）を大阪府松原市内で過ごし、22 歳から調査時現在までの約 4 年間に東京都内で過ごした移住者の 1 人である。同郷の対者である S1 と S2 はともに中学校以降に知り合った友人である一方、異郷の対者である D1 と D2 は東京移住後に知り合った職場関連の友人であるという違いがある。この対者の性質の違いが X の言語使用に影響している可能性はあるが、X 本人が「親しい関係にある」と自認する関係性の範疇において、どのようなスタイル差がみられるかを描くことが本稿の目的の 1 つでもある。次節以降では、こうした対者の性質の違い等を含むスタイルの在りようを丹念にみていくこととしたい。

### 3. 結果①：場面別にみる X の言語使用

続いて本節では、主要話者 X の場面間の言語実態を概観する。まず 3.1 節にて分析項目の詳細について述べ、続く 3.2 節で結果の全体像に言及する。

#### 3.1. 分析項目

本調査では調査場面を同郷場面と異郷場面の 2 つに大別し、そこで得られるスタイル差を踏まえ、それぞれの場面をさらに 2 場面ずつに細分化したうえで個々の異同をみる。各場面で用いた言語形式のうち、特に文法項目を中心に量的分析を行った。

主な分析項目として、各場面の対者が同郷（大阪）の出身とそれ以外（関東圏及びその周辺地域）の出身であることを考慮し、大阪方言形（以下方言形）と標準語/東京方言形（以下標準語形）に対応関係がある 7 項目（断定形式・推量形式・動詞否定形式・否定疑問形式・ノダ相当形式・間投助詞・終助詞）を取り上げる。各項目の具体形式を下表 3 に示す。

表 3 主要な分析項目一覧

	大阪方言形	標準語/東京方言形
断定形式	ヤ	ダ
推量形式	ヤロ(一)	デショ(一)、ダロ(一)
動詞否定形式	ヘン/ヒン、ン	ナイ
否定疑問形式	ヤン(カ)、チャウ(ン)	ジャナイ、ジャン
ノダ相当形式	ン(ヤ)、ネン・テン	ノ(ダ)、ンダ
間投助詞	ナ	ネ
終助詞	デ、ナ	ヨ、ネ

標準語形のうち、動詞否定形式のナイ及び否定疑問形式のジャナイに関しては、それぞれの音的変異ネ(一)とジャネ(一)を含む。また、ノダ相当形式については、主節末に位置し、かつ方言形ネン/テンに対応する説明的用法を持つもの<sup>(2)</sup>に限定した。加えて、間投助詞は上掲の形式のほかにサの使用がみられたが、サは東京方言由来の形式ではあるものの、近年では近畿若年層の言語体系に意識・実態ともに浸透しつつあり(芝本 2021)、実際に本データからも場面差が

得られなかったことから、本稿では取り上げない。終助詞は機能・用法的に対応がみられる各2形式（デとヨ、ナとネ）のみを取り上げる。なお終助詞ナに関しては、大阪方言の専用形式として一概にはみなしにくい場合がある。詳細は4.4節で触れるが、本稿では特にネの現れ方を中心に考察することとし、ナの性質の判断については深く立ち入らないこととする。上記7項目に加え、個々の場面での使用に特徴的と判断した項目についても、4節以降の各節にて個別的に提示する。該当形式のうち、話し手の心内発話を含む引用発話文に現れた形式については、分析から除外した。

### 3.2. 結果の全体像

本節ではまず、主要話者Xの言語スタイルの全体像を示すために、同郷場面と異郷場面における方言形・標準語形の使用実態を明らかにしておく。下記図1は、前節に挙げた7項目における両形式の使用比率を同郷場面と異郷場面に分けて示したものである。

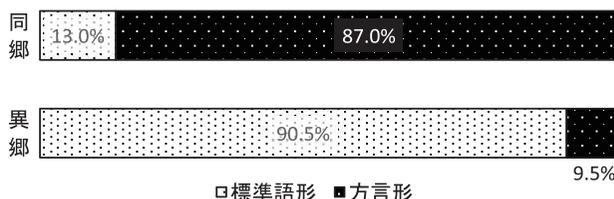


図1 Xの方言形/標準語形の場面別使用割合（全体）

図1から、Xの言語使用の全体的傾向として、同郷場面と異郷場面で使用形式に比較的大きな偏りがみられることがわかる。すなわち、異郷場面では標準語形が9割方に上り、同郷場面では反対に方言形が大半を占めており、当該場面にてそれぞれ使用が期待される形式（異郷場面での標準語形、同郷場面での方言形）が大勢を占めるという、場面間の切り換えが明瞭な話者であることがみてとれる。

続いて図1の内訳として、各場面の対者に対する使用をみる。次掲図2は、同郷対者（S1・S2）と異郷対者（D1・D2）に対する方言形/標準語形の使用比率を示したものである。

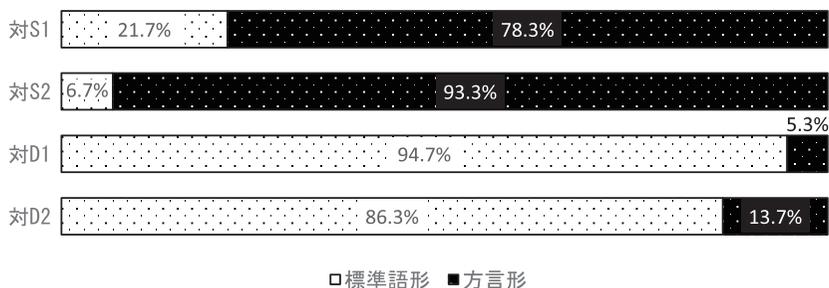


図2 Xの方言形/標準語形の各対者別使用割合

図2が示すように、同じ場面の対者であっても、各形式の使用比率に微妙な隔たりのあることがみてとれる。同郷対者では対S2の方言形使用比率が9割を超えているのに対し、対S1は8割以下にとどまっており、対する異郷対者の場合にも同様の差異がみられる。出身地や親しさの度合いが類似していたとしても、全く同様の使用の在り方にはならず、ここにXの多様な言語運用の一端をうかがい知ることができる。

こうした対者ごとの使用実態の違いが何に起因するものかを明らかにするために、次節以降では、対者ごとのXの使用実態をより詳細に分析していくこととしたい。その際、図1・2において分析対象とした項目以外のものも適宜提示しつつ、分析を進めることとする。

#### 4. 結果②：話者別にみるXの言語使用

本節では、前節にみたXの言語使用の全容を踏まえ、4名それぞれの対者に対する言語使用の詳細について個別的に分析する。それにあたり、まずは前節に示した7項目の実際の使用実数を対者ごとに示し、各節に入る前の土台として提示しておく(表4)。

表4 Xの対者別使用形式数一覧

分析項目 (網掛部分が方言形)		同郷場面		異郷場面	
		対S1	対S2	対D1	対D2
断定形式	ダ	6	2	141	127
	ヤ	91	161	1	3
推量形式	デショ(ー)	1	1	16	8
	ダロ(ー)	1	-	14	30
	ヤロ(ー)	21	31	2	4
動詞否定形式	ナイ	4	1	31	65
	ヘン/ヒン	15	11	1	4
	ン	10	41	6	5
否定疑問形式	ジャナイ	-	3	13	18
	ジャン	-	-	6	10
	ヤン(カ)	9	23	4	1
	チャウ(ン)	1	7	-	-
ノダ相当形式	ノ(ダ)	7	5	28	16
	ンダ	-	-	18	7
	ン(ヤ)	24	10	5	12
	ネン・テン	11	8	-	1
間投助詞	ネ	12	3	34	35
	ナ	5	12	-	-
終助詞	ヨ	9	5	40	27
	ネ	20	6	55	30
	デ	6	10	-	2
	ナ	24	47	3	27

なお、各談話の文字化時間はいずれも 60 分程度に統一しており（表 2 参照）、X の談話間における発話総量にも大きな差は見られなかった。以下では、上掲表 4 に示すデータ及び個々の対者への使用に特徴づけられる項目も含め、対者ごとにみられる X の言語使用の詳細について検討する。

#### 4.1. 対 S1（同郷①）

3.2 節でみたように、S1 は同郷対者ながら、X の標準語形使用が 2 割以上を占める結果となった。その内訳として先の表 4 をみると、断定形式のダや動詞否定形式ナイ、間投助詞・終助詞におけるネといった標準語形の使用が、同じ同郷対者である S2 に比べるとやや目立って観察される。特に間投助詞・終助詞におけるネは、同項目の方言形ナをを上回る、ないしそれに迫る使用がみられる（間投助詞：ネ 12 例・ナ 5 例、終助詞：ネ 20 例・ナ 24 例）。従来、大阪方言ではネは丁寧体などの高い文体や上品志向の話者に用いられやすく、日常語としてはナやその長呼形ナーが一般的であることが指摘されてきた（平山編 1997 他）が、こうした点を踏まえると、対 S1 の場面は X に標準語スタイルを表出させる何らかの要因があるものと捉えられる。以下は、X のネの使用の一例である<sup>(3)</sup>。0622 の発話では、ネとナを交互に使用する様子がかがえる（ネは下線部、ナは点線部）。

##### (1) 【よく行くスーパーについて】

0621 S1：次の日休みでちょっと時間ある日とかは、区役所前で降りて N【地名】まで歩いて、ライフ【スーパー名】行ったあとそこから《そこから》歩いて帰るけど。

→0622 X：あーなるほどネ。ライフネー。ライフナー。ライフってこっちにもあるけど、俺の近所にはないんよナー。

0623 S1：ライフって関西と関東にしかないらしい。

→0624 X：（関西と関東）にしかないネ。

0625 S1：うん。中部地方にはない。

→0626 X：ない。ライフネ、うちの本社の、うちの本社のすぐ裏側に、ライフがあんねん《あるのだ》。A【地名】の。

一方で、X は S1 に対し、従来の伝統的な大阪方言形の使用を維持する側面もみせている。それは、特に動詞否定形式の方言形ヘンの使用において観察できる。以下は、表 4 の動詞否定形式ヘン/ヒンのうち、五段動詞とカ行変格（カ変）動詞にヘンが接続したものと、表 4 では算出しなかった可能形式+ヘンの実現形の分布を示したものである。参考として、対 S2 のデータも併せて示す。

表5 対S1・S2(同郷場面)におけるヘンの実現形分布

		対S1	対S2
五段+ヘン	語幹末ア段 (例: 書かへん)	2	4
	語幹末エ段 (例: 書けへん <sup>※1</sup> )	7	5
可能+ヘン	可能動詞否定形(例: 書けへん <sup>※2</sup> )	-	1
	助動詞否定形 (例: 書かれへん)	1	3
カ変+ヘン	ネオ方言形他(コーへんなど)	-	-
	従来型(ケーへん)	2	-

※1: 「書かない」の意。

※2: 「書くことができない」の意。

従来の伝統的な大阪方言では五段動詞に否定形ヘンが接続する場合、「書けへん」のようにその語幹末がエ段化する現象が知られている(方言文法全国地図(GAJ)第80図他)。加えて、可能形式に関しては「書けへん」のような可能動詞否定形よりも、「書かれへん」のような助動詞否定形の方が優勢との指摘もある(山本1962他)。Xの対S1・S2の使用をみると、五段動詞+ヘンにおける語幹末エ段化はいずれに対しても使用があり、S1に対してはア段による実現形よりも多く用いられている。可能形式+ヘンに関しても、得られた用例自体が少ないため断言はできないが、従来型の形式の使用がみられる。さらに、カ変動詞の否定形においても、大阪方言の伝統的な形式であるケーへんの使用を対S1に対して行っている点から、先の終助詞ネのような標準語スタイルへの志向がすべての項目に渡って表れているわけではないことがみてとれる。

以上から、XはS1に対し基本的には方言スタイルを維持しているものの、間投助詞や終助詞を中心とした一部形式においては標準語形の頻用がみられるといった運用を行っていることが明らかとなった。

#### 4.2. 対S2(同郷②)

続いて、対S2の使用の詳細について検討する。3.2節の図2によれば、Xは対S2において方言形使用が9割以上を占めていることがわかる。その内訳は表4にもあるとおり、対S1に比べると標準語形の使用が少ない点に加え、伝統的な大阪方言形の使用が多い点が目立つ。先の表5に示した五段/可能+ヘンの従来の使用形式である語幹末エ段化形や助動詞否定形の実現数がそれぞれに複数例みられることから、対S2における方言スタイルの強さがうかがえる。

この点に関連するその他の分析項目として、アスペクト形式を挙げておきたい。以下は同郷場面におけるアスペクト形式の使用実数を形式ごとに算出したものである。なお、本項目のテルは方言形トルに対応する形式ではあるものの、テル自体が標準語の影響を受けた形式とは一概に断定できない(井上1998)ことから、標準語形・方言形の対立形式としては算出していない。以下では、方言形トルにおける対者間の使用数の差異に着目する。

表 6 対 S1・S2（同郷場面）におけるアスペクト形式の分布

	対S1	対S2
テイル	3	1
テル	73	100
トル系 <sup>※</sup>	1	25

※テオル（1例：対S1）を含む。

表 6 によると、X は両対者に対し基本的にはテルを主要形式として選択している一方で、方言形トル及びそれに準ずる形式（テオル）の使用も一定数行っている。ただし、その数は対 S1 では 1 例、対 S2 では 25 例と隔たりがみられる。大阪方言を含む近畿圏でのトルは、テルに比べて軽卑的意味合いを帯びることが指摘されている（岸江 1990）が、X のトルのうちそれに該当する使用は対 S2 の 2 例にとどまった（以下（2）参照）ことから、X は純粋なアスペクトを示す形式としてテルとトルを併用しており、後者の運用が特に対 S2 の場面に偏っていることが示された。対 S2 のトルには、現在では使用が少なくなっているとされる否定現在形（（し）トラん）も含まれ（3）、従来の運用の保持が対 S2 場面に目立って観察される事例が、当該項目からも得られたといえる。

(2) 【自分の会社の社会人野球チームの戦績について】ま、ちょ《ちょっと》、だいたい 2・3 回戦目でいっつも負けトンのやけどさ《負けているのだけれどさ》。

(3) 【S2 の高校の友人について】卒業してからもそんなにおーたりとか《会ったりとか》しトラんの《していないの》？

なお、対者 S2 自身の使用を確認したところ、可能形式の助動詞否定形は複数例確認できた一方で、五段動詞否定形の語幹末エ段化は観察されず（いずれもア段で実現）、かつアスペクト形式の方言形トルの使用は 1 例のみ（過去形トツ）であり、X に比べると大阪の伝統的な方言形の使用がやや少ないという結果であった。この点を考え合わせると、X は大阪在住者である S2 以上に伝統的な方言使用を実現しているとみなすことができる。

以上から、X は対 S2 場面では従来の伝統方言形式の使用を比較的強く保持しており、標準語形の使用が多くない点からも、方言スタイル志向の運用を行っているといえる。

#### 4.3. 対 D1（異郷①）

本節及び次節では、異郷対者に対する使用実態について詳述する。まず本節では、対 D1 の使用を確認する。X は D1 に対し、標準語形を頻用する標準語スタイル志向の運用を行っている（3.2 節図 2）。その内訳（表 4）から、最も多い方言形でも動詞否定形式の 6 例と、すべての項

目において方言形使用数が10例を下回っている方言抑制型の運用である。動詞否定のンに関しても、対者であるD1のン使用に反応した(D1の発話を反復した)と思われる例(4)や、D1への直接の使用ではないと考えられる例(5)を含むことから、対D1におけるX自身の方言形の純粹な使用という点では、その数はさらに減じられると思われる。

(4) 【ガスの値段について】

1024 X : プロパンって高いの? 都市ガスより。

1025 D1 : え、ゆーて《と言って》、男の一人暮らしなら変わらン《変わらない》。

→1026 X : 変わらン《変わらない》?

1027 D1 : うん。な、家族(がいる場合)とかだと変わるんだと思うよ。

(5) 【TV番組の中継先の会場名紹介の字幕表示を見て】

→0183 X : NHKのスタジオ名で書かれてもわからンわ。

0184 D1 : [笑]「NHK CR509」。わかんない。

0185 X : 全然、そ、わかんない。

(5)の0183は見慣れない表記の会場名紹介という、いわばXの置かれた状況への評価的反応を独言的な形で示した発話であり、D1に対する直接的な発話とはみなしにくい。一方、D1の発話への応答を示した0185では、ンではなく標準語形ナイが選択されている。

その他、推量形式の方言形として現れたヤロ(一)については、2例とも「なんヤロ《何だろう》」の形でフィラー的に表出した(6)。こうした話し手自身の推量判断を表出する推量形式は、聞き手の存在を問題とせず独り言としても用いられる(船木2011)ことから、方言形が選択されやすいと考えられる。すなわち、これも先の動詞否定形式と同じく、D1への直接的な働きかけとしての使用ではないとみなすことができる。

(6) 【イベントの開催地について】 え、けどさ、なんヤロ、イベントとかさ、イベントとかって一、意外と名古屋飛ばされんだよな《飛ばされるのだよな》。

さらに、音声的な変異からも、XのD1に対する標準語スタイル運用の強さがみてとれる。以下は、東京方言において文体的に低い場面で現れやすい連母音融合形(三井2017)の実現数を対者別に示したものである。参考として、同郷場面の結果も併せて示す。

表 7 同郷/異郷場面における連母音融合形の分布

	同郷場面		異郷場面	
	対S1	対S2	対D1	対D2
[ai] → [e:] (例:ない→ネー)	1	-	31	25
[oi] → [e:] (例:すごい→スゲー)	1	2	6	2
[ae] → [e:] (例:おまえ→おメー)	-	-	1	-
計	2	2	38	27

これによると、まず同郷場面と異郷場面では連母音融合形の使用総数に明らかな違いがあり、場面間の切り替えが明確に行われていることがわかる。この点から、X は連母音融合形をその場面での使用に適したものとして選択的に用いていると考えられ、特に対 D1 では3つの融合パターンが観察された。これはすなわち、X は D1 に対し、方言を抑制するだけでなく、標準語（東京方言）要素を積極的に活用していることを意味すると思われる。

以上から、対者への直接的な使用という観点で X の談話を捉えた場合、対 D1 は他の対者との談話に比べて方言抑制的であり、かつ標準語要素の積極的な運用を行っていることが示唆される結果となった。

#### 4.4. 対 D2 (異郷②)

最後に対 D2 の使用実態について述べる。対 D2 では対 D1 と同様に、基本的には標準語スタイルを主とする運用が行われているが、方言形使用割合が対 D1 よりも高い (図 2)。D1 との違いとして特に際立つのが、ノダ相当形式の方言形ン (ヤ) と終助詞ナ の頻用である。

ン (ヤ) は「(相手への説明として) 俺、大学に {行く/行った} ンヤ。」のように、ネン/テンに置き換わる説明的使用のものとして立てたが、実際には断定のヤが落ち、終助詞ヨ/ヨナが接続したン+ヨ/ヨナの形で実現した例が 12 例すべてを占めた (7)。

- (7) 【出入国の際のコロナ陰性証明の有無について】 えっと、韓国は調べたンヨ。韓国は一、えーっと、まじでなんも要らない。[略] 今までどおり行ける。韓国と台湾は調べたンヨ。で、台湾も、今までどおり行けるみたい。

こうした説明的使用に関わるノダ相当形式の方言形は (7) にあるようなン (+ヨ) が主であり、ネン/テンの使用は 1 例のみであった。これは対 D1 の使用にも通じることだが、ネン/テンの使用がほとんどみられない (対 D1 では 0 例) ことを考え合わせると、異郷場面では基本的に方言形使用が少ない点に加え、方言形が使われる場合であっても、さらに方言形内部での切り替えが行われていると思われる。つまり、ネン/テンといった大阪方言的色彩が強く形態的にも目立ち度

の高い形式を極力控え、それに代わるものとしてン（+ヨ）による表出を行っているのだと考えられる。言い換えれば、方言色の強い要素を抑制することによって、方言スタイルとは異なるスタイルに寄せようとする運用が行われていると推測できる。

なお、終助詞ナに関しては、話者属性による使用頻度の偏りはあるものの、標準語形にも同形式が存在する（日本語記述文法研究会編 2003）ため、一概に方言形/標準語形の切換えとはみなしにくい例もある。大阪方言を含む近畿圏で限定的とされるネの使用がある場合は標準語スタイルの選択とみなすことができるが、その反対のケースには慎重になる必要がある。本稿では対応関係を持つ形式として便宜的にナとネを立てたが、異郷場面で用いられたナをすべて方言形とみなしてよいかについて、詳細は別で論じることとしたい。

ただ、対 D2 におけるナの使用数を方言/標準語のスタイル差として判断するのが難しいとしても、D2 に対するナ/ネの使用差は何らかの異なるスタイルを用いていることの表れと解釈できる。この使用差は、ある種の丁寧度という尺度でみた場合に、説明が付くものと思われる。特に D1 に対する使用との差異を考えた場合、対 D2 のナの多さ（及び対 D1 のネの多さ）はこの丁寧度の違いという点に関わってきそうである。詳細は 5 節で述べる。

以上から、X は D2 に対し、基本的には標準語ベースのスタイルを保持しつつも、対 D1 に比べ方言的要素の表出を許容する傾向にある点、また、方言形/標準語スタイルとは異なる視点での運用を行っている可能性を指摘した。以上の分析を踏まえ、次節では X の言語使用の様相を再度整理したうえで、各場面間に現れた異同の要因について考察を試みる。

## 5. 考察：スタイル運用のグラデーションとその要因

3 節と 4 節の分析から、親しさのレベルが類似する対者であっても、X の言語使用には場面間でかなりの差異のあることがみてとれた。4 名それぞれの対者に対する使用を方言要素と標準語要素の強さの尺度で図示すると、おおよそ下記ようになる。

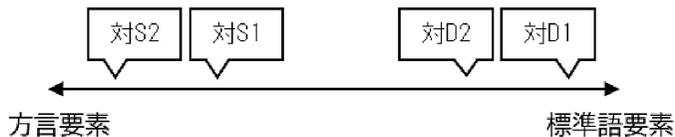


図3 Xのスタイル運用のグラデーション

図から、対 S2 の運用が最も方言要素活用型（標準語要素抑制型）である一方で、反対に対 D1 の運用が最も方言要素抑制型（標準語要素活用型）であり、対 S1 と対 D2 がその間に位置しているという構図になる。同郷場面の対者には方言要素活用型、異郷場面の対者には方言要素抑制型の運用に概ねなっていることを踏まえると、X の言語運用を決定づける点としてまず述べられるのは、対者の出身地域が同郷（大阪）であるか、さらに言えば対者が自身と同じ母方言を話すか

否かという点であろう。一方で、同じく上図3からわかるように、同じ同郷対者、異郷対者であっても、対 S1 と S2、対 D1 と D2 ではそれぞれに微妙な差異が生じた。以下ではその要因について、対者ごとに考察する。

### 5.1. 対 S1 と対 S2 におけるスタイル差

まず、最も方言要素の実現度合いが高い対 S2 と、方言スタイルを基盤としつつも標準語要素の実現がある程度確認された対 S1 における差異の要因として、X の置かれた環境による問題が挙げられる。2 節の表 2 に挙げたように、今回の調査は対 S2 場面のみ大阪で実施し、対 S1 及び異郷場面は東京にて実施した。X は 22 歳から調査時現在まで東京都内に在住する移住者であるため、同じ同郷出身者との談話であっても、調査地が移住先であることが X の言語使用に幾ばくかの影響を及ぼした可能性がある。対者の S1 も調査時点で東京在住約 1 年の移住者（表 1 参照）であるが、S1 自身の言語使用を確認したところ、対 X での方言形使用割合が 92.1%（標準語形使用割合が 7.9%）と方言形が 9 割以上を占めていた。このことから、X の対 S1 における標準語要素の実現は、同じく移住者である S1 の言語運用に直接影響を受けたものとは考えにくく、対者への適応というよりも調査環境への適応が X のスタイルを決定づける要因として強く働いていると推察される。

対する S2 との談話では、むしろ自身の母方言である大阪方言のとりわけ伝統的な使用（トルの否定現在形や五段動詞否定形の語幹末エ段化、可能形式の助動詞否定形など）が目立ったことを考えると、X は出身地である大阪かつ同郷の友人との場面という環境を、本来の自分らしさを最も体現できるある種の「ホーム」と捉え、「大阪出身者としての自分らしさ」（ひいては大阪在住者である S2 以上に）全面的に表出するに至ったものと考えられる。

なお、S1 は X の中学校以来の友人、S2 は大学以来の友人（表 2 参照）と、知り合った時期の異なる対者である。一般に、社会性が身に付く以前の狭いコミュニティで出会った相手の方が、使用言語の形式やスタイル自体もよりローカルなものが選択されやすいと考えられるが、中学時代の友人 S1 との方で標準語形を多用した X は、それと相対する運用を行っているようにみえる。X の場合、やはり調査環境が移住先の東京であったということが、話者間の関係性以上に自身の言語運用に影響したものと思われる。一方で、より正確なスタイル差を考察するためには、同じ対者と別の調査地で調査を行った場合の結果（対 S1 場면을大阪で行うなど）などとも比較する必要がある。今後の課題としたい。

### 5.2. 対 D1 と対 D2 におけるスタイル差

続いて、対 D1 と対 D2 のスタイル差の要因について検討する。最も標準語要素の実現度合いが高い対 D1 と、標準語スタイルを基盤としつつも方言要素の実現がある程度確認された対 D2

における差異の要因として、1つに、それぞれの対者との関係性が挙げられる。

2節表1・2に示した通り、異郷対者D1とD2はXの職場で知り合った相手であるため、大学以前の知り合いである同郷対者のS1・S2とは関係性としての性質が異なることを踏まえておく必要がある。加えて、D1は職場の同期とはいえXよりも年長者であり、D2は後輩であることから、年齢差が個々のスタイルに多少なりとも影響したことは否めない。4.4節にて、対D1と対D2の終助詞ネとナの使用差に丁寧度が関係している可能性を述べたが、D1・D2ともにすでに見知った仲とはいえ、年長者であるD1には大阪方言ではフォーマル度の高い場で用いられやすいネを多用し、年少者であるD2には方言形（ないし標準語形でもフォーマル度の低い場合に使われる）ナが一定数得られたものと考えられる。

こうした丁寧度の尺度に関連して述べると、Xが用いた丁寧形（デス・マス系）にも対者間で偏りがみられた。次掲表8はXが使用した丁寧形の対者別使用分布である。デスの変異形でありフォーマル度の低いス系（ッス・ンス・ス）も別で算出した。

表8 Xの丁寧形の対者別使用分布

	同郷場面		異郷場面	
	対S1	対S2	対D1	対D2
デス系	10	11	40	6
ス系	2	1	3	1
マス系	5	11	12	16
計	17	23	55	23

表8によると、同年齢のS1・S2に対しても丁寧形が一定数使用されていることから、Xは日常的にアップシフト（常体を使用している話者が敬体を一時的に使用する現象（千々岩2016:115））を頻回に行う話者といえる。ただその中でも、対D1における丁寧形の使用総数が他の話者に対するその倍以上になっていることから、XにとってD1は他の対者以上に丁寧さを付加する必要があった、すなわち年長者であることが背景にあったとも考えられる。加えて、丁寧形の使用とは反対の方向性、すなわちより低いスタイルとして用いられやすい連母音融合形が同じく対D1場面で際立ったことを考え合わせると、「年長者ではあるが仲の良い同期でもある」というD1との微妙な関係性が、そうした両極端の言語実態を生んでいる可能性も併せて指摘できよう。

ただ一方で、Xのこうした使用は単なる年齢差や相手との関係を意識したものにはとどまらない可能性が示唆される。次掲表9及び表10は、各場面の対者がXに対して用いた実現形とその使用数を示したものである。前者が丁寧形、後者が連母音融合形を示す。

表 9 各対者の丁寧形の使用分布

	同郷対者		異郷対者	
	S1	S2	D1	D2
デス系	3	-	20	36
ス系	2	1	17	146
マス系	2	1	7	34
計	7	2	44	216

表 10 各対者の連母音融合形の使用分布

	同郷対者		異郷対者	
	S1	S2	D1	D2
[ai] → [e:]	-	-	17	-
[oi] → [e:]	1	1	4	-
[ae] → [e:]	-	-	-	-
[ui] → [i:]	-	-	6	-
計	1	1	27	0

まず表9の丁寧形をみると、年少者であるD2はXに対し基本的に敬体のスタイルで一貫しているため使用総数が多いのは当然である一方で、年長者であるD1もまた、Xに対して少なくない数の丁寧形を用いていることがわかる。加えて、異郷場面でXの（特に対D1にて）使用数が目立った連母音融合形に関しても、他の対者に比べD1自身の使用が27例と突出している。なお、D1はXからは得られなかった[ui] → [i:]の融合形（例：だるい→だりー）も複数例使用しており、連母音融合形にバリエーションがみられる。

以上のことから、Xの標準語スタイル（ないし丁寧スタイル）は対者のその影響を受けたもの、すなわち一種のアコモデーション（対者の言語使用に合わせた使用）による実現となっている可能性が併せて指摘できる。対者のスタイルに合わせつつ、そのスタイルそのものや、そこに用いられる諸言語要素を当該場面に適した運用として、すなわち当該場面らしさを反映した要素として把握し、同場面及び類似の場面（対D2）でも適用しているものと考えられる。異郷場面でXの連母音融合形が目立つのは、こうした一連の過程によるものと推測できる。

ここまで、各対者によるXのスタイル差の生起要因について考察した。調査地や対者との関係性など、言語外的な要素が影響していると考えられる一方で、Xの各対者への運用に共通する点として、自らのスタイルを当該場面に最も即したものにへと寄せるために、個々の言語要素をその手段として活用している可能性がある点を指摘した。

## 6. まとめと課題

本稿では、大阪出身若年層1名を対象に、一地域言語話者の複数場面における言語スタイルの運用の実相を事例的に分析し、そこに現れたスタイル差の要因についても併せて考察を行った。明らかになった点を冒頭の目的に照らしてまとめると、下記ようになる。

- A) Xは同郷・異郷場面でスタイルを明確に切替えるタイプの話者である。
- B) 同一場面の対者であっても、それぞれに使用する方言形/標準語形の割合が様ではない。その要因として、調査地の違いや対者との関係性の違いが考えられる一方で、自身の移住者としての在り方や対者へのアコモデーション等を通じ、当該場面に沿った自己表出の在

り方として方言/標準語スタイルを活用している可能性がある。

なお本稿では対者との親しさの度合いを極力統一したうえでデータ収集を行ったが、やはり特に異郷場面において、話者の関係性や年齢差に起因するスタイル差の可能性が示唆される結果となった。今後はそうした言語外的な側面以外の部分にどのようなスタイル差の要因があるかを把握するためにも、調査地や年齢などの変数を調整した場合の運用の在り方をみる必要がある。他方で、今回のように話者 X 自身が相手に対して親しさを自覚する（「丁寧さの有無」という点では自身の言語使用に対者間で差がないという）意識を持っていても、結果として言語実態に幾分の差異が生じたという点は、話者自身の意識と実態に乖離があることの証明ともいえる。一個人のスタイルが実態としてどのように実現するのかを検討することの重要性を新たにすることは、本調査の1つの収穫ともいえるだろう。

一個人がどのような言語スタイルを有し、運用しているかに関して、特に実態把握の側面では研究が進行途中の段階であり、引き続き事例の蓄積と仔細な分析が求められる。本稿はその一素描に過ぎないが、多様なスタイルの実相を明らかにするためにも、本稿の調査ではなし得なかった場面のデータを補いながら、事例分析を進めていくことを課題としたい。

## 付記

調査にご協力いただいた話者の方々に厚く御礼を申し上げます。本稿は JSPS 科研費 24K16085 の助成を受けている。

## 注

- (1) 1人の言語使用者が様々な場面や状況に応じて使い分けることばのレパートリー及びその使用がもたらす社会的、心理的、談話的効果を指す（渋谷 2015: 23）。本稿でもこの定義に従う。
- (2) 説明的用法とは、下記例1のようなものを指す（\*は非文、?は不自然の意）。大阪方言のネン及びその過去形テンは、例1のように話し手自身の情報を聞き手に説明する場合には使用可能だが、例2のように聞き手の情報を受容したことを示す場合には用いることができない。なお、標準語形のノ（ダ）及びンダはどちらの用法でも使用可能である。ンヤは例1ではやや不自然となるが、ヤが落ち終助詞が付加した形（ンゆ等）は自然である。本稿ではこの終助詞付加形もンヤの例として算出している（結果的にはンヤで得られた例はすべてこの終助詞付加形であった：4.4節参照）。

例1) 【聞き手に説明しながら】 実は、明日映画を見に行く {ノ/ンダ/?ンヤ/ネン}。

例2) 【聞き手の説明を受けて】 へえ、明日映画を見に行く {ノ/ンダ/ンヤ/\*ネン}。

- (3) 用例内の各種記号の用途は次のとおりである。【 】：文脈理解のために必要な情報／《 》：方言形や音韻変化形などの共通語訳／| }：非言語要素／（ ）：補足が必要な要素／→：注目箇所

## 参考文献

- 井上文子, 1998. 日本語方言アスペクトの動態—存在型表現形式に焦点をあてて. 秋山書店.
- 宇田萌美, 2017. 母方言・移住先方言・標準語のスタイルシフトの実態. 阪大社会言語学研究ノート 15:1-35.
- 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室編, 2002-2005. 阪大社会言語学研究ノート.
- 岸江信介, 1990. 「昭和」における大阪市方言の動態. 国語学 163:13-26.
- 言語編集部編, 1995. 言語別冊 24-12. 大修館書店.
- 国立国語研究所, 1991. 方言文法全国地図 第2集. 財務省印刷局.
- 芝本彩乃, 2021. 関西若年層における間投助詞の使用実態. 阪大社会言語学研究ノート 18:98-118.
- 渋谷勝己, 2013. 多言語・多変種能力のモデル化試論. In: 片岡邦好・池田佳子編, コミュニケーション能力の諸相—変移・共創・身体化. ひつじ書房, 29-51.
- 渋谷勝己, 2015. 書きことばにおけるスタイル生成のメカニズム—山東京伝を例として. 社会言語科学 18-1:23-39.
- 高野照司, 2011. バリエーション研究の新たな展開. 日本語学 30-14:256-275.
- 千々岩宏晃, 2016. スピーチスタイルアップシフトの会話分析を用いた研究—日本語の雑談における反応要求の技法. 日本語・日本文化研究 (大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻) 26:115-126.
- 日本語記述文法研究会編, 2003. 現代日本語文法 4 第8部モダリティ. くろしお出版.
- 平山輝男編, 1997. 日本のことばシリーズ 27 大阪府のことば. 明治書院.
- 船木礼子, 2011. カジュアルスタイルにおける方言切換え—形式の受容と切換えの要因. 神女大國文 (神戸女子大学国文学会) 22:1-20.
- 三井はるみ, 2017. 東京都方言. In: 方言文法研究会編, 全国方言文法辞典資料集 3 活用体系 2. 方言文法研究会, 57-66.
- 山本俊治, 1962. 大阪府方言. In: 榎垣実編, 近畿方言の総合的研究. 三省堂, 421-494.
- Eckert, P., 2000. *Linguistic Variation as Social Practice*. Malden, MA: Blackwell.